
インモラル 裏返りの瞳

?島イロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インモラル 裏返りの瞳

【Nコード】

N3195T

【作者名】

? 島イロ

【あらすじ】

戦場カメラマンの篠崎は、戦地で奇妙な光を見た。光源を探り当たった篠崎が見たものは巨大なクレーターと無数の無残な姿の死体。そして、対峙した二人の少年だった。

プロローグ

1

篠崎正臣しのざき まさおみは埃ほこっぽい砂煙すなけむりが舞う中、夢中でシャッターをきっていた。

レンズに写り込んでいるのは、森の中に突如として現れた巨大なクレーターと無数の死体。そして、二人の少年だった。その光景はあまりにも非現実的で、カメラのディスプレイに映し出さなければ、幻か白昼夢かと思いついてしまふに違いない。ただ、鼻につく夥しい量の血の臭いだけは、現実を帯びていた。

内戦が止まないユーゴスラビアで戦場カメラマンとして入国していた篠崎が、飛来する弾丸やミサイルを避けながら非戦闘区域に脱出しようと車を無我夢中で走らせていた時だった。

街より東の森の向こうで、大きな光の渦が浮かび上がった。ミサイルや爆弾のような爆発音がなかったことに、篠崎は引っ掛かった。(セルビア軍か、NATO軍の新兵器だろうか)

カメラマン故の性が高ぶる好奇心に勝てず、車を東へと向けた。森の中へ入り、道がなくなるところで車から降り、カメラ片手に茂った藪を突き進んでいく。

すぐに十メートル程の崖が現れ、下には草原が広がっていた。その中央に、隕石でもぶつかったかのように地面が抉れており、吹き飛ばされたセルビア軍の装甲車が数台転がっていた。

そこまでは、今まで何度も見たことがある光景だ。戦場ならばありふれた光景。

奇妙なのはクレーターの中央で、対峙する二人の少年。

一人は東洋人系の顔立ちで、黒い髪に黄色の肌。目立たなく地味な容姿は、日本人のようだ。

もう一人はこちらに背を向けているために顔は見えない。だが、

血色のない白い肌に癖毛で硬そうな髪は銀色だった。例えアルビノだったとしても薄い金髪になるはずである。白髪でもない、風に揺れる髪は確かに銀色に輝いていた。その後姿は、人の形をした人間で成らざるものようだ。

何より、二人とも一糸纏わぬ姿で、辺り一面には死体が転がっている中を無表情で立っている。驚きや怖がっている様子は微塵も感じられない。いくら戦地で育った現地の子であったとしても、速やかに爆心地から逃げ出すものだ。

奇妙なことは、まだある。

セルビア軍と思われる転がった死体たちは、どう見ても火薬の爆破で大破したと到底思えない有様であった。

内臓は全てぶちまけられ、頭から指先まで骨が剥き出しになっている。肌の色が識別できないほど中からめくれ上がっていて、筋肉や脂肪の黄色いぶよぶよしたものが露わになっていた。本来見えるはずの部分が見えなくて、見えるはずがない部分が見えている。

(人間の身体が裏返されている)

おかしな表現だが、これ以上にならない適切なコメントを心中で呟いた。

考えるよりも先に、カメラを構えていた。

シャッターボタンを押しながら、この写真が多くのメディアに使われる想像をする。自分の撮った写真が、怠惰したマスコミに震撼を呼び起こすのだ。テレビ、新聞、週刊誌、一気に篠崎の名が上がるだろう。奇怪な目の前の出来事に、恐怖ではなく歓喜さえしていたかもしれない。

銀髪の少年に変化があったことに、気づかなかった。

シャッター音に合わせて、コマ送り少年はゆっくりと顔だけを振り向かせる。

一枚、二枚と、ボタンを押す度に少年の顔がはっきりと写される。背中に冷たい汗が流れた。

それでも、カメラを止めることはしない。

動かないのだ。身体が。

少年の眼が紅い光を鈍く放つ。

この世に存在しない紅い光に魅入られた篠崎は、身体の内側に熱いエネルギーを感じた。

第一部：1

窓のすぐ傍で、葉桜が風に揺られていた。幹の椀には散った花びらが積もっている。昨日の放課後に掃除したばかりなのに、すでに地面を覆う花びらを見てアズサは恨めしく思った。

掃除しても掃除してもキリがない。桜に花が無くなっても、今度は落ち葉を掃除しなければならぬ。

松永アズサは溜め息をついた。

クラスメートのほとんどは何らかの部活に所属しており、面倒な外の掃除は帰宅部のアズサの役割になっていた。誰かに直接頼まれたいわけじゃないが、クラスの雰囲気彼女にそれを強制していて、アズサの方も、嫌々ながらも忠実に面倒なことを引き受けてしまう性たまた嫌うアズサにとって、団体生活を余儀なくされる学校という場所が嫌いだった。そして、アズサは拒否したりしない。他人とぶつかり合って、必要以上に会話するのが億劫だったからだ。

自分でも損な性格だと自覚はしていたが、直す気もない。結局は、自分にとって一番楽なポジションでいたかった。無理して楽しくないことで笑ったり、我を通して喧嘩したり、相手に気を使ったりすることなど苦痛でしかない。

独りは楽だ。それが十四年間生きてきたアズサの結論だった。

「ねえねえ、松永さん」

前の席に座っている少年が、上半身だけをアズサに向けた。授業中にも関わらず、大胆な行動をする。

「シャーペンの芯ちょーだい。俺の無くなっちゃった」

一応、教師の冷やかな視線を意識してか、声は潜めて言う。

アズサはケースごと渡すと、少年は微笑み、「ありがとう」と前を向いた。

(買ったばかりなのに)

この少年に物を貸して、返ってきたためしがない。半ば諦めて、黒板の数字を手元のノートに写しだした。

中学二年に進級すると共に、ロンドンから転校してきたというこの少年。髪は銀色に輝き、瞳は海のように青い。名はハイネ。

誰とでも屈託なく接するハイネは、もちろんアズサにも気軽に話しかけてくる。どんなに愛想を悪くしたところで、ハイネは気にすることなくテリトリーに侵入してきた。

(外人はこれだから嫌い)

それに比べて、ハイネと共に転校してきた柚宮真希ゆみやまきのほうが好印象だった。ハイネと遠い親戚にあたるらしいが、真希の容姿はハイネと正反対に地味な日本人だ。性格も暗く、休憩時間は常に図書室で借りてきた本を広げている。アズサ以上に誰とも会話しようとせず、空気のような存在だった。

だが、クラスメートたちの二人に持つ印象は、アズサとは異なるものだった。

「ハイネくん」

二回目の休憩時間に、澤田未央さわだみおが駆け寄ってきてハイネの机に小柄な尻を下ろして脚を組んだ。

「今日、一緒にカラオケ行こうよ」

茶色に染めた長い髪を、片手でいじりながら甘えた声で言う。女子の前では決して出さない声色だ。

「えー、俺行きたくない」

「なんでよう。女の子もたくさん来るよう。あたしが奢るからさ」
少し不満げな態度を見せて、未央は顔をハイネに近づけた。

「カラオケとか興味ないし。それに放課後は忙しいの、俺」

「忙しいって何してんのさ。塾？」

「違うよ」

「じゃあ何よう。いつつも袖宮と一緒に帰ってるけど、あんたたち何してんの」

「夕飯の調達」

「まさか、同棲!？」

「そだよ」

「えー！　なんか想像できない。袖宮とハイネくんが同棲だなんてえ」

「なんで？」

「だって、全然タイプ違うしい、なんで仲がいいのか超ギモン」

未央は眞希を睨み付けるが、とうの本人は素知らぬ顔でロシア文学全集第二巻を読んでいる。

タイプが違う、という発言に対して、アズサは未央に共感を覚えた。

明るく笑顔を絶やさず、寝癖の酷い頭、学校指定外の黒のカーデイガンを羽織り、首もとはは解けそうな黒のネクタイがだらしなく絞められているハイネ。

対して、眞希は暗く無表情で、短く切り揃えられた髪、学校指定の白いニットのベストを着て、ネクタイはきちんと絞められている。未央をはじめ、クラスメートの多くは容姿も愛想も良いハイネと仲良くなりたがり、反対に何の取り柄もなさそうな眞希は興味の対象外だった。

そんな眞希に、ハイネのほうからくつついて回っている。

登下校はもちろん、昼休みも一緒に学校のどこかへ消えてゆく。

誰かが一度、立ち入り禁止のはずの屋上で昼寝するハイネと、隣で読書する眞希を見かけたらしい。

それから、陰では「二人は恋人」説が囁かれていた。

「だって親戚だし、長い間ずっと一緒に過ごしてきたから仲良くて当たり前だろ」

「そーだよ。あたしはハイネちゃんと袖宮がデキてるなんて信じないもん」

そう言つて、未央はハイネに抱きつく。ハイネのほうは、あからさまに身を引いていた。

「よくやるよね」

アズサの後方から、女子たちの囁きが聞こえてきた。

女子に絶大な人気のあるハイネを、恋人でもないのに独り占めしようとする未央に嫉妬した輩たちだ。だが、不思議と未央を虐めたり反抗したりせず、陰で悪口を叩く術しか知らない。

未央にはそういう目に見えない権力を持つていた。誰にも有無を言わせないカリスマ性。

悔しがるだけしかしない女子たち。

アズサは興味無さげに溜め息をついて、ずれた眼鏡を人差し指で直した。

机に肩肘をついて、教室内の人間模様を観察していたアズサの横を朝倉千絵あさくらちえが分厚い本を抱えて通りかかった。

「なにこれー」

アズサの席を通り越したところで、ハイネは本を無理やり奪った。朝倉は鋭く睨み付けて

「なにをするのよっ！」と、本を奪い返そうとした。

ハイネは巧みに朝倉の手を逃れ、本をめくり出す。

「へえ、魔界大全？ 面白そうだね」

「返しなさい」

長く伸びた前髪から覗く釣り上がった右目が、異常な眼光をギラつかせている。今にも、掴みかかりそうな迫力が滲み出ている。

「朝倉さんて、こういうのに興味があるの？」

「あんたには関係ないでしょ」

「ちよつとお、やめときなよ。こいつオカルトマニアで超気持ち悪いんだから」

本人を目の前にして、耳打ちすることなく堂々と言う未央を無視

して、朝倉はハイネの方に手を差し伸べた。

「とにかく返して」

「これ貸して」

「はあ？」と、間抜けな声を発したのは未央だ。

「俺、こういうの興味あるんだ。読んでみたい」

「ええー、ハイネくんてオタクってやつ？」

「なんかさ、人間がどんなものに恐怖を感じるのか知りたいっていうのかなあ。ダメかな朝倉さん。今日中に返すから」

朝倉は黙ってハイネの言葉を聞いていた。右目には、まださつき
の鋭さは残っていたが、本を指して

「それ、高いんだから絶対に返してよ」と言った。

「ありがとう、帰る頃には返すよ。大事にする」

ハイネは予想以上に喜んでいようだ。

それを見ていたアズサは、珍しいこともあるものだと思席へ戻る
朝倉を見送った。

魔界大全と書かれた表紙は革で装丁されており、中身は上質紙に
びっしりと文字と不気味なイラストが描かれている。ひと目見た
だけで、かなり高価な書籍だとわかる。それを、あっさりと返却を
知らないハイネに貸すのだから案外、朝倉も銀髪の少年を気に入っ
ているのかもしれない。

すっかり本に夢中になっているハイネに相手されなくなり、暇を
持て余した未央はもうすぐ三時間目のベルが鳴るというのに教室を
出ていった。

ハイネはその後、授業中も休憩時間もひたすら読み続けた。昼
休みは、いつものように眞希と共に屋上かどこかへ消えたが、その
手には魔界大全が抱えられていた。

五時間目、教室に戻ってきたハイネはまた本を開く。

驚いたことに、難解な説明がびっしりと詰まった五百頁はあろう
か本の後半に差し掛かっていた。この熱心ぶりからして、途中で読
み飛ばしたとは思えない。かと言って、初心者が誰の解説もなしに

読み解いていくには非常に高度な読解力が必要になる。

眞希にも言えることだが、帰国子女にしては日本語が上手い。そして読み書きにしても、よく理解している。

聞くところによると、日本に住み始めたのは二ヶ月前かららしいのだ。

もちろん、事前にロンドンで本格的な日本語の勉強をするなり、眞希が日本人国籍なのだから両親に教わったということも考えられるが、それにしてもこの教室にいる誰よりも頭脳明晰かと思わせるほどだ。

六時間目が終わり、アズサが外の掃除へ行こうと席を立つと同時に朝倉がハイネの元にやってきた。

「ずいぶん熱心に読んでたわね。興味があるっていうのは嘘じゃないんだ」

「うん、すごく面白かった」

「あなた、これ全部読んだの」

「読んだよ。アスタロトって美しいイメージだったけど、出現時には酷い異臭を放つんだってね。あんまり出会いたくないな。ねえ、こういう本、また貸してよ」

朝倉は少し驚いた顔をしてから、差し出された本を受け取った。

「……いいわよ」

「やった、よろしくね朝倉さん」

ぼんつと朝倉の肩を叩いて、教室の外で待つ眞希の元へ駆け寄っていく。

俯いた朝倉の表情は読みとれなかったが、赤く染まる頬をアズサは見逃さなかった。

教室から出たアズサはそのまま一階へ降り、靴箱と並ぶ掃除箱から竹箒とチリトリを持ち出して、中庭を横切って駐車場前の道に移動した。ちょうど、いつも外を覗いている窓の下だ。そこに一本だ

け淋しげに植えられた桜が、次の季節のために花弁を散らしている。風起舞う薄桃色の雪は綺麗だが、落ちてアスファルトにへばりついた姿は情緒のかけらもなく、ただの塵屑となってしまう。掃こうにも千切れた花弁がうまく箒にからまってくれず、かき集めるだけで時間を要した。

集めた花弁を回収しようと足元に置いていたチリトリに手を伸ばしたが、あるはずのものが無い。宙を切る手に視線をやったところで、前から声がした。

「はい、どうぞ」

顔を上げると、いつの間にか花弁の山にチリトリを横付けたハイネがしゃがんでいた。

気配無く、突然現れたクラスメイトに驚き、心臓が一瞬だけ高鳴る。

「なにしてるの」

アズサの質問に、ハイネは

「暇だからお手伝い」と微笑んだ。

「放課後は忙しいんじゃないの」

「真希が図書室行ってるから、待ちぼうけをくらってるのさ。それで、ここに来たら松永さんに会えるかなと思って」

チリトリを引たくって、ハイネに背を向ける形でアズサは黙々と箒を動かした。

「君さ、俺のこと嫌いだよ」

掃いたそばから、風に吹かれて桜は命を落としていく。適当に切り上げればいいものを、アズサは狂ったように片っ端からチリトリに掃き入れていった。

「俺に印象残したくてワザと冷たくしてくる奴はいるけど、君は本気で嫌ってるね」

「誰にでも好かれるとも思ってるの？　そーいうの自惚れっていのよ」

背後で「あーあ」という溜め息の後、笑いを含んだ声でハイネは

言う。

「へえ、松永さんてそんなこと言えるんだ。教室では従順な女の子って感じなのに。かなりの二面性だね」

「それだけ嫌いってことに気づきなさい」

あくまで感情をハイネに悟られぬように冷静に振る舞うが、無意識に眉間に皺が寄る。

これは自分でも驚くことだった。こんなにも他人に自分をぶつけるなど未だかつて無かった。それは大抵、最初にアズサに拒絶された人間は二度と深く踏み込んでこようとせず、建て前だけの関係になるため言い争いすら起こらずに済んでいたからだ。

だが、ハイネはどんなに振り払っても、羽虫のようにしつこくまとわりついてくる。これ以上どうやって拒めばいいのか分からなくなり、怒りが込み上げてくるのだ。

「なるほど、だからすっげえ壁が厚いんだ」

「なんの壁」

「心の壁だよ。眞希が言ってた。松永さんは誰よりも鉄壁だって。特に俺に対してか……いや、接触してくる奴に対してだろうな」

「柚宮くんが？」

「箒の動きが止まる。」

「一見、従順な態度は素直に見えるけど、実は全てを拒絶してる珍しい人って言ってたよ」

あの、本以外の森羅万象に興味がなさそうな柚宮が自分のことをそんな風に分析していたということに、ドキリとする。

ハイネといい、そんなに自分は興味湧くような人間なのだろうか。

「んーでも、度を超えた拒絶は、逆に人を引き寄せてしまう。悪い意味だね」

「それも柚宮くんが？」

「そうだよ。君のこと、気に掛けてるみたいだ」

一瞬、ハイネの蒼く透き通る瞳の奥に冷たい焰が揺らめいたのを、

背を向けているアズサは気づかなかつた。すぐに、いつもの子供じみた無邪気な笑顔に戻る。

「眞希に、あんまり心配かけさせんなよ」

「勝手に心配してるほうが悪い」

「……俺も心配だな」

溜め息混じりに、空気に融け込みそうなくらい静かに言うハイネからは、からかっている雰囲気は感じられない。

「馬鹿じゃないの」

だからこそ、よけいに苛立ちが募る。

ハイネも袖宮も、他人と真剣に向き合おうとしないくせにアズサにだけは境界線を越えて踏み込もうとしてくる。

一度もハイネのほうに振り向くことなく、アズサはその場から走り去った。

吐き気がする。

どうして自分も、他の人に接するように適当にしてくれないのだろうか。

他人との隔たりが大きい都心ほど、不審死は物珍しくはない。最近では老人よりも定年を過ぎたばかりの五十代から六十代の孤独死が増えている。とはいえ大抵は腐乱した遺体やその現場を檢視し、身元を特定すれば終わりだ。汚れた部屋の始末や遺体の処理は別の業者がやってくれる。警察の仕事は、その遺体に犯罪痕があるかどうかを見極めるまでで、田丸英治郎にとっては造作無いこと、のはずであった。

目の前のそれを見据えてじっとしている。これを見るのは三回目である。それでも現場に踏み込んだ田丸を始め捜査員たちは立ちすくんだまま身動きが取れないでいた。しばらく呆然としていたが、鑑識の一人がトイレに駆け込んだところであちこちから溜め息が洩れ始めた。「おい、現場を汚すな」と先輩鑑識員がトイレに向かって怒鳴る。

「何度見ても凄まじいな、こりゃ」

同僚が言う。田丸も白髪が混じり始めた後頭部を掻きながら「全くだ、おかげでしばらく定時に帰れそうにもないな」とぼやいた。

「それだけならいいが、俺なんかしばらく肉食ってないぞ。おかげでコレステロールが減ったんで医者に褒められちゃった」

「死者のおかげでお前は長生きできるってわけだ」

田丸は飛び散った赤い液体を避けて、できるだけ遺体の傍に近寄った。遺体――なんだろうこれは。見た目はただの肉の塊だ、だがよく見れば手の形のようなものがあつたりするので元は人間だったのだと窺える。

正直どこから手をつけていいのかわからない。傍にいた監察医に

遺体の状況を訊ねた。

「練馬、中野とほとんど一緒だな。詳しくはこの肉団子にメスを入れてやらんと何とも言えんが、まあ前回と同じ結果だろうよ」

「つまりー」

田丸は初老の監察医を見た。監察医の臉が肯くように軽く閉じられる。

「裏返し、か」

人体が裏返されている。骨や内蔵は剥き出しになり、指先まで完全に中身が表に出てきている。だが、不思議なことに繋ぎ目がない。前の遺体は二体とも、本来は外側にあるはずの皮膚や髪、着用していた服までもが中から出てきたのだ。

生唾を呑み込む、気持ちが悪い。何十年も刑事をやってきた男が腹の底から思う。気持ちが悪い。

どうやってこの肉塊を作ったのかわからない。

動機もわからない。

ましてや、人間の仕業とは思えない。

今まではどんなに異常な犯行現場でも、殺人者の臭いが残っていたものだ。争った形跡、身体の一部、被害者との繋がり、浮かび上がる感情。それは人である以上、何かの痕跡を残してゆく。

だが、今回の事件は、突如として都会の真ん中に肉塊が現れたようだった。

自分の手では犯人は挙げられそうにもない、長年の勘が田丸にそう告げる。この事件を追いかけける者がいるとすれば、好奇心に支配された者だろう。どんな奴がどんな理由で如何なる方法でこの肉塊を作ったのかを知りたくて仕方がないそんな人間。

俺は知りたくねえな、と田丸は目を伏せた。次の新しい肉塊が生まれなければいい。これで終わりにしてくれ。俺はこのまま定年退職して慎ましく暮らしてえだけだ。

その時、玄関の方から慌てた様子で入ってくる者がいた。

「遅れてすみません」

その男は元々目が細いせいか、申し訳なさそうにすると目が完全に閉じているようにしか見えない。

「遅いぞ篠崎、なにしてた」

はいーと若い刑事は重々しく口を開いた。

「牛丼をー食ってました」

トイレから出てきたばかりの鑑識課の新人は、再びトイレに駆け込んでいった。

ベテラン鑑識員は溜め息を洩らす。

「同じ若者でもこの違いは何だ。お前がうちに来れば良かったのに」「いえいえ、僕はただ腹が減っては頭が回らぬ、という体質なだけです」

篠崎は不適な笑みを浮かべた。田丸が首を横に振る。

「こいつは二十年に一人いるかの逸材だ。クレイジーな性格してるが鑑識にくれてやるわけにはいかんな」

「おお、田丸警部が僕を褒めてる」

「おい篠崎気づけ、褒められてるのは能力だけで人格は全否定だぞ」同僚たちの注意喚起も虚しく、篠崎は意気揚々と裏返された人間を眺め始めた。時折、独り言のように相槌を打つ。

「先生」

篠崎は観察医を呼んだ。

「これ、前のやつより上手に裏返ってますね」

「何故そう思う」と問うたのは田丸だ。

「うん」

篠崎の細い指が、遺体の額らしき場所を指した。そこには紫色の細い筋がある。

「この繋ぎ目が綺麗になってます。前はもつと雑な傷でした」

驚いた様子で田丸と観察医は、その肉眼では分かり難い紫色の痣を見た。

「繋ぎ目あんじゃねえか、先生」

田丸に睨まれ、観察医はたじろいだ。

「ない、ないんだって」

「じゃあこれは何だよ」

「これはワシも調べた。でも繋ぎ目などではない。ただの痣だったんだよ」

「皮の表面じゃなく、裏側に痣なんかできんのか」

「痣としか言いようがない。内出血でもないんだ。その皮膚組織の色が違うだけなんだからよ」

この観察医の腕の良さを田丸は知っている。普通に医学的に見ればこれは痣なのだろう。しかし、おそらくは篠崎が正しいと田丸は思う。

「次はこの繋ぎ目も無くなってるんでしようね。どうしよう、段々と巧くなってきました。まるで練習でもしているみたいだ」

「練習だ。それなら完成体が出来上がるまで殺しは続くつてのか」
田丸は頭痛がした。これを作った奴は、どんな風に人間を裏返せたら完成になるのだろう。

飛び散った血痕を避けながら、篠崎は遺体の真正面に立つ。ぐるっと頭を回して天井から床まで眺める。豪華なクリスタルシャンデリアから隣の寝室へ行く扉、カウンターキッチンに向こうに置かれた冷蔵庫まで辺り一面赤く染め上げられている。遺体がもたれ掛かっている硝子窓からは夜景の光が射し込んでくるが、それもまた血のフィルターを透かされて赤い光となっていた。

篠崎は自身の足下を見て、笑った。

「ここに立ってたんです」

篠崎の言いたいことは田丸にも解っていた。

その床だけ木目が綺麗に見えていた。血が飛び散る瞬間に、ちようど人が立っていたように。

けれどもそれなら、一体どうやって部屋を出たのだ。どこを歩いても血痕は避けられないこの部屋に足跡は一つもなかった。

被害者は樋口武雄、三十四才。マツタニケンという別名で音楽プロデューサーを生業としていた。数多くのアイドルグループをデビューさせ、流行りに疎い田丸でも曲を聴けば知っているものもある。発見者はマネージャーの吉岡だ。深夜に樋口から妙な電話があり、気になって自宅マンションまで様子を見に来たのだという。

二十四時間コンシェルツが受付に立っているセキュリティの高いマンションだ。玄関の扉は鍵がかかっていたことから樋口本人が合い鍵を持つ吉岡ぐらいしか出入りはできないようになっていて、職業柄、警戒心の強い樋口は恋人でさえ部屋に招き入れなかった。

吉岡はリビングの扉を開けた瞬間、異常な光景に恐ろしくなり部屋を飛び出して警察に通報した。中の肉の塊は確認していなかったが、後に樋口が死んでいることを伝えられても驚いた様子はなかった。あの部屋の状況を見て、ここの住人は生きてはいないと感じたのだ。

「いずれ、誰かに殺されるんじゃないかとは思ってました」
落ち着きを取り戻した吉岡は淡々と喋った。

「女遊びが酷い人でストーカー被害も日常茶飯事でした。オーディションに来た女の子ともそういう関係になって親御さんが訴えに来たときもあります。そのときも結局は金で解決したというか、口止めしたというか。他にも良くない噂はたくさんあります」

しょっちゅうワイドショーや週刊誌に女性絡みの話題が取り上げられていた。吉岡が言うには、その八割は真実とのことだ。

樋口武雄に恨みを持つ人間は多い。

「恋人については？」

「さあ、恋人といってもいろいろいましたから」

「一番付き合いが長いのは」

「ああ、さゆみさんか。一ヶ月前に別れたみたいですが。それから連絡を取り合っている様子はありません」

宮部さゆみは樋口が上京し始めた頃からの恋人である。

「別れ話はすんなりと？」

「いえ、さすがにあっさりとはいきませんでした。もう十何年も樋口の女癖の悪さを我慢しながら付き合っていたんですから。樋口は別れたがっついていましたが、さゆりさんは嫌がっついてるみたいでした。電話で喧嘩しているのも何度も見かけました」

吉岡の証言から宮部さゆみを重要参考人として搜索を始めた。だが、元いたマンションは引き払っており、実家にも戻っていない。両親にもここ一カ月ほど連絡がなく、搜索願いを出そうかと悩んでいたところだった。

現場の雰囲気からみて、宮部さゆみが犯人として疑いが色濃くなってきた。

疑い、というより望みに近い。

あのような犯行を人間の手で行われたと思いきみたくないのだ。

それは田丸も同じ想いであつたが、宮部さゆみが犯人でないことは解っていた。もし宮部さゆみが犯人だとして、他の類似した変死体はどう説明するのか。もしかしたら同じ共通の知人かもしれない。知人でなくとも、模倣犯か、実は宮部さゆみは快樂殺人犯で篠崎の言うようにあの肉塊を作る練習台を探しているか、動機はいくらでも考えうる。だが証拠がなければただの妄想に過ぎない。

「まずは宮部さゆみ探しですね」

篠崎は宮部さゆみの勤めていた会社に行くつもりらしい。新人教育に抜擢された田丸も着いていく。

「田丸さん、お願いがあるんですが」

運転席の篠崎は、赤信号で停車すると言った。

「宮部さゆみの所在が解つたら、練馬と中野の変死体をもう少し詳しく調べたいんですが」

「どちらにしろ、そうなるだろ」

「それは良かった」

平常を装ってはいるが、どことなく楽しげである。不謹慎な奴だと思いつつ、田丸も死者に対して何の感情も湧いてこない。粛々と法に従って職務を全うするのみだ。

だが、

「お前はどっ思う。同じ犯人だと思っか」

「同じ犯人ですよ」

田丸さんもそう考えてるでしょ、と篠崎に言われ、田丸は頷いた。

数週間後、自身が住んでいたマンションの給水タンクから宮部さゆみの遺体が発見された。

驚くほど綺麗な満月が、闇夜に浮かんでいた。

穴の開いた暗幕から光が射しているかの様に、月は平面的に輝いている。樋口は高層マンションの二十階から覗く都市の夜景よりも、そちらを肴にしてワインを飲んでいた。

照明を落とした部屋の窓は、外光を鮮明に映す。夜の匂いを硝子越しに感じながら、彼女の歪んだ顔を思い出していた。

初めは、恋人同士でよくある喧嘩だった。

いつしかお互いに憎しみ合っていた。

怒りで我を失いかけていた彼女は、どんな手段を使ったとしても樋口を自分の前に平伏せたかったらしい。

携帯電話の画面を、樋口に向けた。

「これを公開するわ」

興奮気味に、彼女は脅迫した。

そこには、今まで彼女にしてきた淫靡な行為が写し出されていた。暇を持て余しているマスコミ界は、ここぞとばかりに騒ぎ立てるだろう。

決して、生ぬるい道ではなかった。

高校卒業してすぐギター片手に上京し、色んなものを犠牲に大事な何かを失いながらやっと掴んだ地位だった。

それが、一人の馬鹿な女の為に崩れさる。

息が荒くなった。

傍にあったレコード大賞のトロフィーを手にはしていた。

力任せに、それを振るう。

次の瞬間、彼女は頭から血を流して床に倒れていた。

痙攣を起こし、目を見開いて死を見つめる彼女を眺めなて、やけにクリアになる脳に安堵感が生まれていた。

「ーこれで、大丈夫だ。
そうして、月光に煌めくワインを口に運ぶ。
足元には、ワインと同じ色をした液体を流す彼女がいる。
今宵の悪魔の宴に祝福するため、グラスを満月に掲げた。」

「ん……？」

ビルとビルの間、人影が見えた。酔いの幻かと思い、目を擦って
みるが人影はそこに存在している。

「馬鹿な」

地上二十階の窓辺に立つ樋口と平行に、二人の少年が何も無い空
間を歩いていく。まるで、透明な板にでも乗っている様に、大地を
歩むのと同じ歩調で。

銀色の髪をした少年は黒のカーディガンのポケットに両手を入れ
て鼻で歌っている。もう一人は文庫本を読み、視線を逸らさないま
ま器用に脚を運ぶ。

「人間……じゃないのか」

その声が聴こえるはずもないのに、銀髪の少年がこちらを向いた。
恐怖よりも先に、視界が暗闇に閉ざされる。

世界、全ての光が消え、上下左右が分からない空間に樋口は立っ
ていた。

酔いが廻って夢を見たんだと思った。それだと、さっきの少年二
人のことも、今の状況も納得がつく。現実の自分は、ソファアの上
で派手な躰でもかいているに違いない。

夢だとしても、不気味な空間だ。

一寸先も闇で覆われているはずなのに、自分の身体だけ発光して
いるのかはつきりと足の先まで見える。きびすを運べば、大理石の
上を歩くのと同じ感触が伝わってくるが、足音は聴こえない。

手を伸ばしてみた。予想通り宙を搔く。

(早く目を覚ましたい)

電話が鳴ってくれないだろうか。なんなら夜更けに突然訪れる無

礼な来客でも、ストーカーでもいい。誰か起こしてくれないだろうか。

フラフラと両手で探りながら、鹿島は闇の中をさまよった。

足元から針のように冷気が突き刺さってくる。体内に侵入してくる冷気は、爪先、頭の先まで浸食する。それなのに、鹿島の身体は汗でぐっしょりと濡れていた。

（なんだこれは？）

暴れる心臓の音と、乱れた呼吸音。これは確かに自分のものだ。自分の体内から聴こえてくる。

だが、押し迫る恐怖が背後からやってくるのが感じる。

一步、また一步と全身を憎しみに変えて近づき、鹿島の肩を掴む者がいた。

乱れた呼吸音。自分のものに、別の呼吸音が重なる。

生臭い死臭が頬に吹きかけられ、鹿島は「ひっ」と息を吸い込んだまま吐き出せなくなった。

これは夢だ、夢だ、夢だ。

硬直した身体は振り向くこともしなかったが、目を閉じる行為さえ奪った。

視界の端に、黒ずんだ紫色の手が映る。指には、去年の聖夜にあげた紅い石の付いた指輪。

「ねえええへええ……」

力の無い、喉元を通り抜けただけの声が樋口の脳裏に響く。

「……どうしてえええ……なぐったのおおおおほおお」

背後のものは、笑いとも泣き声とも判別がつかない奇声を鳴らす。

「そっ、ひよっ……」

樋口は、弁解しようとして声を出そうとするが、口が震えて言葉に表せない。悲鳴すらも上げられない。

「……いたかったようっとうっとう」

冷たい手が、喉に触れた。

「ひっぎゃあああー！」

振り向き様に、後ろのものを殴り倒した樋口は、床に這い蹲るそれを何度も何度も足で踏みつけた。その鼻は砕け、顔が歪に変形してゆく。それでも足は止まらない。

樋口は何百回と踏みつけると、衝動的に闇を駆けだした。何かを叫んでいたかもしれないが、もはや聞き取る余裕すらなかった。

これは夢だ、夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ。

夢なのに息があがる。苦しくなって、脚を止めた。

(早く目覚めろ、目覚めるんだ！)

自分の頭を殴ったり、膝を拳で打ちつけたりして衝撃を与えてみたが、闇の世界は変わらない。

覚めることのない夢への絶望感に、脚から崩れ落ちた。目の前の夢を見ないように、両手で顔を覆う。

夢、違う、これは現実だ。

彼女を殺した真実から目を背ける。

「俺は悪くない悪くない。あいつが、俺を脅すからー」
奥歯が規則的にガチガチと音を鳴らす。

自己弁護を呟きながら、身体を丸めていた。

そうしながら、どれくらいの刻ときが経っただろう。あいつの気配は全く途切れていた。

落ち着いたら、とりあえず死体を運び出そう。山にでも埋めてくればいい。絶対に見つかからない自信が、樋口にはあった。

震えも収まり、そっと両手を顔から遠ざける。

そこは、いつもの見慣れた夜景が広がっていた。床には、飲みかけのワインが入っていたグラスが転がっている。やはり、立ったまま夢を見ていたのだ。

鹿島はゆっくりと立ち上がり、動かない彼女の首へ手を当て脈を計った。無音だ。この身体に、血液は循環していない。

長い息を吐いてから、転がっているグラスをテーブルに置く。

ピリリリ、と突然に鳴りだした携帯電話に身体をビクリと痙攣した。

「なんだ今頃、もつと早くかけてこいよ」

(そうしたら、あんな怖い夢を見なくて済んだのに)

樋口は、笑みさえ顔に浮かべて軽い足取りで携帯電話を手にした。画面にはマネージャーの名前が点滅している。ようやく現実を実感し、安心しきった様子で通話ボタンを押した。

「もしもし、吉岡?」

樋口はマネージャーの名を呼んだが、返事はない。

「おい、電波悪いのか? 俺の声聞こえてるか?」

自分の携帯電話の画面を確認したが、電波状況は良い。問題があるとすれば、あちら側だろう。

「全く、電波良いとこで電話しろよな。とりあえず切るぞ」

そう言っただけ電源ボタンを押して、電話をソファーに投げ捨てた。

何か急用があれば、あとで掛け直してくるだろう。

飲み直そうかとワインセラーに向かいかけたとき、また携帯電話が鳴った。何度も掛けてくるとは、やはり急用なのだろうか。

画面には、マネージャーの名前。

「もしもし? なんだよこんな時間に」

また、電話の向こうは沈黙を守っている。

電波が悪い場所で、こう何回も掛けてくるような阿呆な奴ではない。

とすれば、マネージャーの携帯電話で誰かがイタズラしてる可能性も出てきた。以前に一度、酔っ払ったマネージャーの友人から呪文の様に愚痴を聞かされ続けたことがある。

「もう切るよ」

電源ボタンを押す。押した途端に、また着信音が鳴る。

マネージャーの名前。

「なんだよ!」

苛立ちを覚えた樋口は、怒鳴りつけてから向こうの音を聞き取って何らかの情報を得ようと耳をそばだてた。外にいれば、雑音が入ってくるはずだ。

「なんだ……？」

微かに音がする。

猫の鳴き声。

いや、赤ん坊の泣き声だ。

それは、段々と音量が上がっていき、樋口の耳にはつきりと聞き取れるようになっていた。

「な、なんのイタズラだ！ 吉岡、おまえか！？」

赤ん坊の泣き声に、女の笑いともむせび泣きとも言える声が重なる。

「ーあか……ちゃんよおお……」

絶叫をあげながら、樋口は電話を壁に投げつけた。衝撃で電池が飛び出し、床にばらまかれる。

だが、電話の着信音が鳴った。電池は抜かれているはずなのに、電話は振動を共にして歌っている。

気配がして振り返った。心臓が爆発しそうに心拍数を上げていく。そこにあるはずのものがなかった。

どす黒く変色した血痕だけが、床にこびり付いている。

「どこ行つた！？」

(生きていたのか、いや、確かに死んでいたはずだ)

この目で、手で死亡は確認した。あれは、死体だった。なのに、何故、消えている。

電話に気を取られていたこの一瞬の内に、誰かが運び出したのだろうか。

「どこ行つたあああ！」

不亂に辺りを駆け回った。寝室、バスルーム、トイレ、キッチン、どこにもない。

玄関の鍵をチェックしたが、チェーンまでしっかりと掛けられている。

高層ビルなのでベランダはない。つまり、密室状態なのだ。

(いる、必ずいる。どこかに隠れている)

寝室のクローゼットに仕舞われていたゴルフバッグからドライバーを取り出し、用心深くリビングに戻った。携帯電話はまだ鳴っている。それをドライバーで粉々に打ち砕いて、ようやく音は止んだ。安心する暇なく、次は家の電話が鳴り出した。キッチンのカウンターに置かれた子機に手を伸ばす。

あれを持ち出した犯人からの電話かもしれない。

「もし、もし……」

激しい息づかいが聞こえてきた。自分の息かもしれない。ただ――

――あ、な、た、の、あ、か、ちや、ん……

これは、はつきりと脳に送られてきた。

「お、オレは子供なんて作っちゃいない」

――いたのよおおおおほおお……おなかにいい……

「知らなかった、知らなかったんだ。お前は、何も言わなかっただろっ」

耳の奥がドクドクしている。

受話器の向こうでは、不気味に「うん、うん、うん」と唸っている。

――あわせてええ……あげようかああ……

「い、いいよ！ 今はいいいから、なっ！」

――かわいいわよおおおおほおお……

荒い息づかいが聞こえる。

……おかしい何かがおかしい。俺はあいつを殺したんだ。

暗い部屋の中、満月の明かりが樋口の影を壁に作っていた。

……殺した、そうだ、コノ手で。でもどうやった。どこで殺した。

ココデカ

耳から受話器が離れない。

離せば、何かが起こる。恐怖で、手に力が入り、耳たぶを圧迫した。

……違う、言い争いになったのは、あいつの部屋だ。あいつの部屋であいつの首をシメタ

ドクドクしている。

……シメテシメテシメテ、そして屋上の水が溜まっている入れ物にステタ

心臓の音。

……じゃあ、この部屋にあったものはなんだっけ
ーう、し、ろ

影が重なった。

篠崎正陽しのざき まさあきはゆっくりとした目覚めを迎えた。落ち着いた息を口から洩らす。いつもと同じくベッドから降りると、パジャマのまま珈琲を淹れた。

もう、このような夢を視ることに慣れていた。視たところで自分にできることは少ないとも理解している。死んだ人間しか夢に出てこない。犯人を捜すとしても、やることは刑事の仕事と変わりはない。そして、夢に出てくる被害者は、必ず、未知の何かに殺されている。突然に人間の

幼い頃は馬鹿正直に周りに話していたが、所詮は子供の言うことなのでまともに聞く耳を持つてくれなかった。やがて相手にされないことを知ると、夢を自分の中で閉じこめておくようになった。それでも恐ろしいものを視たときは独りで情報を抱えきれず、眠ることができなくなる。そんなときは兄が話を聞いてくれた。兄は篠崎の夢を否定も肯定もせず、ただ内容だけをじっくりと噛みしめた。それだけで篠崎は悪夢から解放され、眠ることができたのだ。

しかし、兄は篠崎が高校生の頃に死んでしまった。戦場ジャーナリストの道を歩んだ兄は、ある日の紛争地域で原因不明の爆発事故に巻き込まれた。遺体の損傷が激しく持ち帰ることが困難だったために、遺留品だけが帰国することになった。

篠崎は壁に掛けてあるスーツの内ポケットから手帳を取り出した。常に持ち歩いているせいかわ角の丸くなった二枚の写真が挟まってい

る。大学時代の兄と中学生の自分。もう一枚は、兄が最期に撮ったものと思われる写真。

クレーターのように窪んだ大地の中央に、裸体の少年が二人写っている。黒髪の少年と、銀髪の少年。

兄が死んでから、この少年たちの夢をよく視る。

彼らがどういう存在かは解らないが、この十数年のあいだ外見は変化せず、特殊な能力を持ち、人を殺していく、人間ではない者というのには理解できる。黒髪の少年は幻を作り上げ人を惑わし、幻で狂ってしまった人間を裏返してしまうのが銀髪の少年だ。彼の眼が紅く光るとき、物理法則を無視して何もかもが裏返る。樋口が体験した恐怖はこの少年たちの仕業だろう。

彼らの目的は謎だ。ただ人を殺したいだけなのかもしれない。だが、彼らは大きな罪を持つ者しか手を下さない。

樋口は宮部さゆみを殺害した。彼女の自宅で絞殺した後に、屋上の給水塔へ遺棄したのだ。中野の被害者は近所の未成年女子を二十人余り暴行していた性犯罪者であったことがわかった。練馬の被害者は殺害される一ヶ月前に小学生を車で轢いた後に逃げている。

兄はこの少年たちに殺されたのだろう。まだ彼らの能力が低く爆発事故と見違える程に汚く裏返しされたのだ。

篠崎は指先で銀髪を撫でた。意志のない紅く光る瞳がこちらを見据えている。

少年たちに問う。

兄は罪人なのかと。

中間テストが終わった頃、空に梅雨の気配が漂うようになった。熱された地面から空中に解き放たれた湿気は、校舎の中にも容赦なく忍び込んでくる。水分を多く含んだ空気は息苦しさを感じさせ、生徒たちの不快指数をこよなく上げた。

暑さを凌ぐために生徒たちは工夫を凝らす。保冷剤を持ってくる者、携帯用ミニ扇風機を机の端に置く者、薄着する者。

とりわけ、未央は大胆にも下着のレースが覗くほど、胸元を開けて団扇で扇いでいる。顔立ちも体系も良い彼女は、教室中の男子の視線を集めていた。眞希を除いて。

「ねえ、暑くないの？」

自分の椅子であるかの様に、ハイネの机に腰を掛けて未央は言った。

「別にいい」

「見てるこっちが暑いんだけど」

この猛暑の中、ハイネは変わらず黒い長袖のカーディガンを羽織っている。それなのに、汗ひとつ流していない。

「日本よりも暑い国とか行ってたから、慣れちゃった。慣れだよ慣れ」

「慣れるか、バカ。あー朝倉あ」

自席でひたすらノートに何かを書いていた朝倉は、返事をしないまま未央を睨んだ。

「なによ」

「ねえ、なんか怖い話してよ。なんか知ってるっしょ」

それを聞いていた周りの生徒たちからも、朝倉に催促する。ハイネも興味津々な様子だ。

珍しく自分が注目浴びたせいか、それとも詰め込んだ知識を披露するのが嬉しいのか、朝倉は得意気に脚を組んで未央の方に身体を向けた。

「じゃあ、この学校の七不思議なんてどう？」

「いいじゃん、面白そう」

「とは言っても、ほとんどは勘違いやデマだったりするんだけどね。でも、ひとつだけ本当も混じってるの」

話し声が消え、静まり返った教室内の生徒たちは朝倉の声に聞き入っていた。

「ある先輩がね、四階の美術室に忘れ物しちゃって放課後取りに行ったの。夕陽も沈もうかという黄昏の時間。暗闇に染まってゆく廊下を歩いてたらね……」

息を呑む生徒たち。暑さとは別の、冷たい汗が背に流れる。

「どこからか歌が聴こえてきたの」

「うた？」

「そう、歌。アヴェ・マリアよ。とても綺麗で、どこか哀しげに歌ってたらしいのよ。女とも男ともわからない声で」

知っている者は頭の中でアヴェ・マリアが流れ、知らない者は勝手に聖歌のようなメロディーを想像した。

「声はどうやら準備室から聴こえてくるみたいで、なぜ、こんな時間に、しかも美術準備室で歌う人がいるのか気になった先輩はドアに手を掛けたの。そしたら、途端に声は止んだ。まるで先輩に気づいたみたいに」

「で、どうなったのよ」

せっかちな未央は、早急なクライマックスを要求した。

「思い切って開けたドアの向こうには誰もいない。狭い準備室だから隠れるような場所もない。不審に思った先輩は、準備室に足を踏み入れた」

「だから誰がいたのよ」

「誰もいないの。くまなく探したけど誰もいない。だけど気配はす

るの。ふと、背後から視線を感じて振り返ったんだけど、そこにはアポロの頭の石膏だけ。だけど視線は感じる。そのアポロから」「なんだ、あのアポロか。ちょっと気味悪いけどさ。視線感じるなんて自意識過剰な先輩じゃん」

「そう思う?」

朝倉は、もったいぶってワザとらしく間を置いてから次の言葉を発した。

「そのアポロの目玉がギョロリと先輩を睨み付けたとしても?」

水を打ったように静まり返る教室。ただ、未央だけは

「先輩の見間違いないんじゃない? あんまり怖くない」

と、あくびをして不満を言った。

「でも、それは実話よ。さっきも言ったけど他の七不思議はガセだからね」

「それだってガセかもしれないじゃん。何を根拠に本物だって言うの」

「それは……」

「なによ」

「その先輩は、私の兄だからよ」

「ふうん、兄妹そろってオカルトオタクなのねえ」

「な、なんで兄までオカルトオタク呼ばわりするのよ」

「幽霊とか悪魔とか存在して欲しいって思ってるから、そんな幻を見るんじゃない?」

「アンタが何か話せて言うから話してあげたのに、何よその言いぐさは!」

「だって、つまんなかったんだもん。怖い話のひとつもできないオカルトオタク」

笑い声が教室の隅々から漏れてくる。

千切れそうな血管を額に浮かべ、反論すべき言葉を失った朝倉は金きり声を一瞬だけ上げると、教室から姿を消してしまった。

ハイネは朝倉の後ろ姿を憐れみの目で見送ってから、机の上で団

扇を扇ぐ未央を見た。

「お前、本当は怖かったんじゃないの？」

「怖くはないもん。だいたい幽霊とか信じてないし」

「信じてないのに、朝倉に話させたのか」

「なんかねえ、苛々したのよね」

「それ、八つ当たりって言うんだぜ」

わかってるわよ、と言いたげに顔をしかめ、そっぽを向く。

「怖え」

クラス中の者が思ったが、口にしたのはハインだけであった。

弁当を食べ終えたところでアズサは筆箱が無いことに気づいた。

四時限目の美術の時だろうか。教室を出て連絡通路となる廊下を渡り、美術室へと向かった。

実習室がある東棟の窓は南東を向いており、昼を過ぎると日は翳り、薄暗い陰気な気配が覆う。一階は保健室があり、二階は職員室があるから人気はあるものの、三階四階は生徒どころか教師たちすらも寄りつかない。東棟の最南端にある階段を登れば、初夏の陽気は消え入り、コンクリートから流れ出てくる冷気が脚を撫でてゆく。生徒たちの喧騒は遠ざかり、自分の踏み出す足音が響き渡った。

踊り場を超えたところで、アズサは上階から話し声か聴こえきたふと、午前中の休み時間に朝倉が言った怪談話を思い出す。壁伝いに残りの階段を登りきり、そっと片目だけを四階の廊下に突き出した。

見慣れた姿が二つあった。白と黒。

「わかるか？ 眞希」

「どうだろう。観察者なら僕でも感知できない」

「そっかあ」

「どちらにしても、用心したほうがいい」

「うん、もう少し遊びたいしね」

美術準備室の前で、ハイネと眞希が不可解な会話をしている。朝倉の怪談話を真に受けて、アポ口像を見学に来たのだとアズサは推測した。

それにしても、ハイネならいざ知らず、眞希までこんな馬鹿げた茶番に付き合っていることが不思議で、少し失望した。

眞希は普通の人間ではない。他人にも自分にも興味がなく、ただ時間を潰すだけの本を仕方なく広げている。何事にもとらわれず無関心でいなければならぬ。そして、それらの行動はアズサにとつて唯一、理解の出来る人だった。

（いや、違う。たぶん、ハイネに無理やり連れて来られたんだ。うん、そうに決まっている。だから、あんなに億劫そうな顔をしているんだ）

ハイネの声と、二人の足音が遠ざかる。教室へ戻るならアズサの居る最南端の階段を使うより、ちょうど棟の中央にある階段の方が近い。緊張が解けたアズサは、息をゆっくり吐き出して廊下に進み出た。

四階の廊下の窓はまだ、真上の太陽から微かに陽光が漏れていた。中庭でふざけ合っている生徒たちの声も、壁に反響してアズサの耳にまで届いていた。

美術室のドアを開く。日光は真逆にあるため、部屋は陰で覆われている。カーテンは明け放たれていて暗闇ではないからか、アズサは電気を点けずに筆箱の在処を探した。

作業していた机の下に転がっていた。しゃがんで手を伸ばす。――声がした。

すぐさま振り向くが誰もいない。だが、まだ声は止まない。耳を澄ますと、隣の部屋から聞こえてくるのがわかった。隣は準備室だ。

ハイネ達が引き返してきたのだろうか。違う、声が違う。

怪談を聞いた生徒の誰かがふざけているのかもしれない。それとも美術教諭かもしれない。

きつとそうだ、あんな話あり得るわけがないーそう信じ込むことで恐怖を和らげようとした。覗いて確認する勇氣もなく、足早に美術室を出ていく。

教室の前で朝倉に出会った。目線が合ったので「あのさっき……」と話しかけようとしたが、朝倉は聞こえていないのかアズサを無視して先に教室へ入ってしまった。

アズサは何事もなかったかのように、俯いて自分の席につく。平然を装っているが、顔はみるみる赤くなる。

何故、朝倉に話しかけようと思ったのか。美術室での出来事で興奮してしまい我を忘れてしまった。誰かに話したくなった。

しかし上手く話しかけられない自分がもどかしい。もつと他の皆のように普通に話しかけられたら良いのにと自分を責める。

その一方で、こんなつまらない事でうじうじと悩むなど情けないとも思う。そうして自分が嫌いで堪らなくなる。だから、人と隔たりの持つ。人と関わらなければ、自分を情けなく思うことも嫌いになることもない。

アズサは頭を振って、朝倉に話しかけようとしたことを忘れる努力をした。

私は何もしていない。何もするはずがない。

私は独りが良い。

独りが楽だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3195t/>

インモラル 裏返りの瞳

2011年5月16日23時55分発行